弘前大学医学部附属病院 Hirosaki University Hospital Bulletin 2003年(平成15年)6月30日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：鈴木唯司病院長）

〒036-8563　弘前市本町53
弘前大学医学部附属病院
TEL0172-33-5111（代表）FAX0172-39-5189

弘大病院広報
南塘（なんとう）だより
第30号
（創刊：1994年12月15日）

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言

弘前大学医学部
附属病院長
鈴木　唯司

昨年秋ＳＡＲＳ（重症急性呼吸器症候群）の集団感染が報告されてから半年以上経ちましたが，やっと発生が抑えられてきたようです。ＳＡＲＳの致死率の高さや，予防法，治療法が不明確だった事もあり，一般の方々は勿論，医療関係者にとってもやきもきする毎日でした。

ところで，問題は日本にも（津軽地方でも）ＳＡＲＳが発生した場合，どのように対処するかです。これまでどこの発生地でも医療機関が集団発生母体のひとつになってしまいました。ＳＡＲＳに対する知識が乏しく，感染の拡大防止対策が後手に廻った事もありますが，病院の特殊性から容易に感染が拡大し，ねずみ算式に罹患者が増加していったのがわかります。これを防ぐには，ＳＡＲＳの疑いのある患者様を最初如何に他の患者様方より隔離して診察できるか，そして万一疑いのある患者様が居た場合，どのように治療病院に搬送するかきっちりした計画が求められます。

大学病院は，その性格上，院内でＳＡＲＳが発生し，閉鎖された場合，影響は計り知れないものがあります。冬のインフルエンザが多くなる時期を前に，一次診療ができる体制と施設を確立するつもりでおりますが，各地方で一次診療を行う病院に対しても，病院任せでなく，国や地方自治体が計画性を持って支援する必要があると強く考えさせられます。

以前言われていたような全く対策の出来ない難病でない事が徐々に解明されてきています。恐れることなく対処したいものです。

診療科の紹介　【第二外科】

第二外科は上部消化管，下部消化管，肝胆膵，乳腺甲状腺グループによる専門診療をしております。手術件数は年間４００～４５０件，外来患者数は月平均１,２００～１,３００人です。上部消化管では近年食道癌症例が増加し，頚部リンパ節郭清を含む３領域郭清を基本としています。下部消化管では自律神経を温存した排尿生殖機能を温存した直腸手術が特徴です。肝胆膵では肝切除や膵頭十二指腸切除にクリニカルパスを導入し，早期退院が可能な体制を作り在院日数の短縮に努めています。乳腺では乳房温存手術症例が増加しています。食道癌に対する放射線科学療法をはじめとする化学療法にあたっては腫瘍の各抗ガン剤感受性試験を取り入れ，テーラーメード治療の確立を実践しています。病院全体のご協力を頂いている生体肝移植症例もこの９年間で１５例となりましたが，更なる症例の増加を期待しながら，一層の研鑽を積む所存です。

外来診療にあっては，科を超えた臓器別診療体系を念頭に置き，乳腺・甲状腺疾患に対して一外科との合同チームによる診療を開始しました。これまでのところ乳腺・甲状腺症例も増加しています。最近，外来待合室に小さいテレビを設置し，ストーマケア等ビデオを用いた患者教育にも利用しています。在宅治療にも積極的に取り込んでおり，昨年は附属病院診療奨励賞を頂き，医師・看護師一同大きな励みとなりました。

多様化している医療制度改革や患者さんのニーズに応えるため，教室創立以来の診療体系を見直し，平成１４年度から教室スケジュールを刷新しました。従来日勤帯であったＰＯＣ（術前術後症例カンファランス）や教室内会議を診療時間外に移行しました。また，総回診も週１回として，時間に余裕のある午後に移行した上，ベッドサイドで行っていた各症例のディスカッションを病室の外で行っています。これにより個人のプライバシーをより強く配慮しながらも，徹底したディスカッションが可能となりました。スタッフミーティングは月曜日の朝８時開始。医員連絡会議は夕方５時半開始で，合併症・死亡症例検討会のある日は夜９時半を回ります。またＰＯＣもＸ線写真がよく検討できるよう，ゼミ室の机を後ろに片づけ，椅子のみを前に出した配置に変更し，以前よりも積極的なカンファランスが行われています。

独立法人化や電子カルテ導入など，様々な局面を迎えるに当たり，医療の質を向上させながら柔軟に対処すべく教室員一同日夜努力いたしております。各方面からのアドバイス等を歓迎しております。

（第二外科）

「病院情報管理システム並びに包括評価方式」について北大病院・寺島医事課課長補佐を迎えて講演会

「病院情報管理システム並びに包括評価方式」についての講演会が，５月19日（月）１８時から１時間半にわたって医学部臨床大講義室において開催されました。

この講演会は，平成１６年１月に更新予定の本院「病院情報管理システム」と，この６月導入の「包括評価方式」について，関係者の理解をより深めるために，北大附属病院医事課課長補佐寺島菊信氏を講師に招いて行われたものです。

講演に先立ち，鈴木病院長から，「新システムの更新に当たっては，北大病院の豊富な経験を参考にさせていただき，本院における導入がスムーズに運ぶようご助言をいただきたい」との挨拶がありました。

講演会では，寺島補佐から、一つ目の講演テーマである「病院情報管理システム」について，昨年２月に更新を終えた北大病院「統合医療情報システム」を例に引いて，準備段階から本稼働に至るまでの院内の検討，準備状況等についての詳しい報告とともに，有益な助言がありました。

引き続き，二つ目のテーマの「包括評価方式」の導入については，本院と同様本年６月に包括評価方式導入の北大病院における準備状況等についての報告がありました。また，『平成１４年７月～１０月退院患者データ』を基にして行った病院評価係数，診療科別，診断群分類別の観点からの分析結果，既に導入済みの他大学病院の状況等について詳しい報告がありました。

さらに，厚生労働省等の考えている包括評価の将来展望などについても適切な解説がありました。

講演会には，医師，看護師等の教職員約２００名が出席し，新システム，包括評価の導入に向けての認識を新たにするとともに，活発な質疑応答が行われるなど，病院運営上の差し迫った課題である両テーマについての関心の高さがうかがわれました。

（医事課）

■講演する寺島補佐

先憂後楽

テーラーメード医療の確立を目指して

神経精神医学教室
助手　三　浦　　淳

最近，「テーラーメード医療」という言葉が頻繁に使われている。これは，患者さん個人の遺伝情報に基づき，その患者さんに合った治療法を選択する，という新しい医療で，「オーダーメード医療」や「個別化医療」とも呼ばれる。昔の医療は，「医者の匙加減」という言葉で表現されたように，各医師の経験で治療薬が選択され投与量が決定されていた。最近では，治療法の普遍化を目指して，「治療アルゴリズム」が作られ，これに従って治療が進められる。「エビデンスに基づいた医療」（ＥＢＭ）と呼ばれる。しかし，いずれの医療でも，全く治療効果がない例や，副作用が強く出現して治療が遂行できない症例がある。それは以前から「個人差」とか「素質」等と説明されてきた。現在では，「個人差」や「素質」の少なくとも部分的には，遺伝子レベルで規定されていることが示されている。薬効の個人差や副作用の出易さは，薬物代謝酵素や標的受容体等の遺伝子多型である程度説明できるようになった。いよいよ次は個人の遺伝子多型から適切な治療法・治療薬・投与量を設定し，最大の効果をあげ副作用を最少にする，「テーラーメード医療」の開発が望まれる。

既に癌の治療の一部では，ある抗癌剤の効き易い人，効きにくく副作用の出やすい人を選別し，治療の個別化を実現していると聞く。私の専門とする精神医学の領域においても，テーラーメード医療開発に繋がる研究発表は，年々増えてきている。神経精神医学教室においても，統合失調症の治療反応性・副作用とドパミン受容体遺伝子多型との関連性，抗うつ薬の薬理効果と薬物血中濃度・薬物代謝酵素の遺伝子多型に関する研究を活発に行ってきた。このような研究成果を積み重ねることで，近い将来，精神医学領域においても個別化医療が実現できるであろう。

本年４月より，病院広報委員会の一員として働かせて頂いている。大学病院の責務は何かと考えると，研究，教育，高度先進医療，地域医療機関への貢献など，多数挙げられる。世界に認められるような研究業績を積み，「是非弘前大学で研究・研修がしたい」と希望する研究者・医師が集まる活気ある病院にしたい。そして，世界をリードする医療・研究機関となることを望む。そうなれば，青森県の医療水準も向上し，地域住人の健康増進にも繋がるだろう。ちょっと夢のような話だったか？いや，絶対に実現しよう。

院内コンサート開催　麻生詩織の歌とトークに楽しいひととき

患者サービスの一環として，恒例の院内コンサート（今年度第１回）が４月２８日（金），夕食後の１８時４５分から外来待合いホールで開かれました。今回は青森市出身の歌手・麻生詩織さんをゲストに迎えて行われました。

開催に当たり，新川副病院長から，「長い入院のひととき爽やかな歌声を聴いて，また頑張って下さい」との挨拶がありました。

コンサートでは，麻生さんが『北国はいいよね』『恋唄綴り』など透明感あふれる歌声７曲を熱唱。じっと耳を澄ましたり，手拍子をとったり，一緒に合唱したりするなど実に多彩なプログラム構成。また，随所にパンチの効いた津軽弁トークが登場したりで，２００人近い患者さん方が麻生詩織の魅力に引き込まれ，十分に堪能した文字どおりアッという間の１時間のステージでした。

麻生さんは，「以前，母が大学病院に入院していたことがあり，よく見舞いに来ていたので懐かしい。一度コンサートを開いて患者さん方に元気を出してもらいたいと思っていました。希望が叶ってよかった」と，少し涙ぐみながら話していました。

今回のコンサートには，麻生さんとともに地元青森放送の夏目アナウンサーが友情出演。息のあった名コンビはテンポ，間合いともピッタリ。当意即妙の爆笑トークを繰り広げ，会場は笑いの渦又渦。

終演のあいさつで，担当者から，「今夜は，患者さん方の興奮度が高くて安眠できないのではないか心配」とのコメントが出るほどに賑やかで，楽しく，そして名残惜しいコンサートでした。

次回は，この夏にコンサート開催を計画しております。

（医事課）

本院における包括評価の導入について

本院では６月から入院医療費の包括評価が導入されました。

診療行為毎に料金を計算する従来の「出来高払い方式」とは異なる新たな医療費の算定方式は「包括評価方式」と呼ばれ，傷病名や手術，処置等の内容に応じて分類された「診断群分類」毎に定められた一日当たりの定額の医療費を基本として計算する方式です。

包括評価の対象は，大学病院等８２病院の一般病棟の入院患者であって，傷病名等が診断群分類に該当するものです。診断群分類に該当しない場合は従来どおり出来高方式となります。

包括評価の基礎となる診断群分類は２,５５２分類ありますが，包括評価の対象となるのは１,８６０分類です。

包括評価制度による診療報酬の額は，診断群分類による包括評価と手術，麻酔，一部の処置等の出来高評価との合計額となります。

包括評価は，入院日数に応じ３段階に設定されている診断群分類毎の一日当たりの点数と入院日数，医療機関別係数により計算されます。

また，入院期間が診断群分類毎の特定入院期間を超えた場合，超えた日以降は出来高により算定します。

退院時の診断群分類が，入院中の各月における費用の算定時に適用した診断群分類区分と異なる場合には，退院時の費用の請求時に差額を調整します。

経過措置として，包括評価の導入時に既に入院していた患者については，２ヶ月間は出来高により算定することになっています。

診断群分類区分の適用は，当該患者の傷病名，手術，処置，副傷病名等に基づき，入院時，定時請求時，退院時に主治医が判断するものとされていますが，本院では「患者ＤＰＣ情報システム」を新たに導入して，主治医の診断群分類区分の決定に活用されています。

（医事課）

看　護　週　間　に　よ　せ　て

今年で１３回目をむかえた「看護の日・看護週間」はメインテーマ「看護の心をみんなの心に」のもと5月11日～５月１７日までの１週間全国でさまざまな行事が展開されました。青森県においても，特別フォーラムや「１日まちの保健室」などを実施しました。

当院においては，恒例の外来ホールでの活け花の展示や，入院患者様へのメッセージカードのお届けなどを行ないました。

今年の外来ホールの活け花は「八重桜」でした。「弘前公園の桜が散ったあとに，また病院の中で桜に会えるとは」といった患者様やご家族の声をお聞きする事が出来ました。桜を前に足を止めてくださる方が大勢あり，今年も飾って良かったという思いをあらたにいたしました。

また，入院患者様へお届けするメッセージカードは，今年はこれまでのイラスト中心のカードとは趣の変わったデザインとなりました。

皮膚科外来五十嵐ハギ副看護師長の作品をモチーフに作成いたしました。

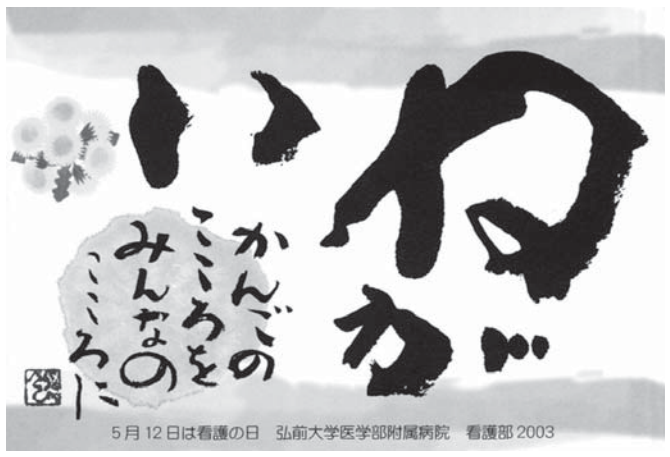
「ねがい」という力強くかつ，やさしさを秘めたこの文字に多くの患者様から感謝の言葉が寄せられました。

また，このカードには，それぞれ担当看護師が，患者様への個別のメッセージを記載しお届けをするのですが，今年も休憩時間を利用してあちらこちらで工夫をこらしたカード作りが行なわれたようです。5月12日ナイチンゲールの誕生日の朝，カードを受け取られた患者様はとても喜んでくださったようです。

こんなエピソードもありました。手術室に向う前に渡された患者様は，とても感激され「カードのおかげで頑張れた」と術後話してくださったそうです。また，ある患者様に「どっちを表にしたらよいか迷う」と言われ，看護師は「どちらを表に向けて飾ってくださるのか最後までドキドキした」といったほほえましい光景もありました。

看護週間行事は，看護部の中にも患者様にも定着してきたようです。

（看護部）



■今年のメッセージカード

「院内感染予防対策とインフォームドコンセント」に関する講演会

感染制御委員会副委員長　保嶋　実

感染制御委員会の主催で，６月２日に医学部コミュニケーションセンターにおいて，東北大学大学院病態制御学講座の賀来満夫教授を講師に迎え，「院内感染予防対策とインフォームドコンセント」と題して，講演会が開催されました。

医療の現場では，医療従事者と患者が相互理解のもと十分な情報を共有した上での患者の自己決定いわゆるインフォームドコンセントの理念に基づいた医療の提供が以前にも増して求められております。とりわけ院内感染の予防と対策には，この理念を踏まえ医療従事者と患者とが協力して立ち向かうことが必須と考えられています。院内でもＭＲＳＡが検出された場合の説明の手順や手術あるいは検査などの前に実施するいわゆる感染症の血液検査などの項目や説明の手順などが統一されておらず，院内全体としての対応を求める声が強くなり，病院長からも感染制御委員会で検討するように指示がありました。しかしながら，特に感染症検査のインフォームドコンセントについてはそれぞれの診療科（部門）での個別の事情があり，委員会としての統一した見解が得られるまでには至りませんでした。そこで，専門家の意見を伺い，勉強し，今後の院内感染予防対策の議論に役立てることを目的に本講演会が企画されました。

講演では，感染予防と対策の基本は手洗いを中心とした標準予防策の遵守と実践であることが最初に強調されました。続いてインフォームドコンセントの意義とその重要性について解説されましたが，感染予防と対策におけるインフォームドコンセントの問題は従来から等閑にされ，特に感染症検査のインフォームドコンセントについて各医療施設での対応はバラバラであり，現時点では統一されていないと述べられました。感染症の検査の実施について，従来は医療従事者の安全確保の視点からのみの説明がなされていましたが，感染予防と対策には公衆衛生学的な面からのアプローチも重要であり，この検査を受けることは間接的にではあるが患者自身の安全確保に繋がり，メリットとなることを理解していただくことが重要であると述べられました。現時点では疾患のインパクトを考慮してＨＩＶ検査などに限定して厳密なインフォームドコンセントが適用されていますが，将来的にはＨＣＶ抗体，ＨＢＳ抗原などを含めてすべての感染症検査にインフォームドコンセントが必須であり，それらに向けての対応が必要であると結ばれました。講演後に福田幾夫教授から手術時の標準予防策の徹底と感染症検査の意義についてコメントがあり，聴衆を交えて活発な意見の交換が行われました。また，講演の後半の部分では，目下の緊急課題であるＳＡＲＳに関して新知見も紹介されました。

本院での懸案事項について，現時点での他施設での対応の状況そして多方面から今後に向けての対応について御教示をいただいた貴重な講演でありました。今後の本院の感染予防対策に生かしていきたいと考えています。講演会の準備に奔走された総務課庶務係の諸氏に感謝の意を表します。

リスクマネジメントマニュアル第3版の説明会開催

医療安全推進室では，平成１４年に医療法関連法規が改正されたことに伴い，安全管理の指針を策定する必要が生じたため，平成１４年９月ワーキンググループを設置して現行リスクマネジメントマニュアル第２版の改訂作業を行い，２月に第３版を完成するにいたりました。

そこで，安全管理の徹底のためにマニュアルのより一層のご活用を願い，３月１７日から２０日までの４日間及び５月８日から９日までの２日間の延べ６日間にわたって医学部臨床大講義室において，説明会を開催しました。

説明会では，医療安全推進室長の挨拶に引き続き，砂田ジェネラルリスクマネジャーと高谷ワーキンググループ委員長（第一外科助教授）から約１時間３０分にわたって，患者様が提供される医療に関して不安を抱くことなく，しかも良質の医療を受けられることを保障するため，また医療従事者が事故のない安全な医療を提供していくための重要な事項について説明がありました。

また医療従事者一人一人が患者様の安全を最優先し，安全に医療を提供する責務があることを認識して業務に当たるよう要請がありました。

今回の説明会には，医師，看護師，薬剤師，検査技師及び放射線技師等医療従事者延べ約８００名を超える参加者が詰めかけ熱心に聴講しました。

（医事課）

■説明する砂田弘子看護師長

病院ボランティアへの表彰及び懇談会開催

病院ボランティア懇談会が去る３月２７日(木)に附属病院大会議室において開催された。

本懇談会は病院ボランティアの拡大，充実等を図るため，現在活動中の病院ボランティアの意見，要望を参考とするもので，今回で７回目となる。

今回は病院ボランティア７名，病院関係者９名，計１６名の出席者のもと活発な意見交換が行われた。

主な意見としては，

- **図書担当のボランティアの人数が少ないため，今後，広報の手段を広げて欲しい。**
- **鍵のかかるロッカーを増やして欲しい。**
- **元気図書館の本棚を増やして欲しい。**

等があった。

また，懇談会に先立ち，活動開始日からの通算活動時間数が１,０００時間を超えた活動員の坂本　妙子氏に，また５００時間を超えた活動員の谷山　理阿乃氏と鍋田　泰子氏に感謝の意を表し，表彰状が授与された。

（総務課）

【 編 集 後 記 】

岩木山も新緑に萌える今日この頃，皆様に「南塘だより第３０号」をお届けいたします。

さて，第二のアフガン戦争の収束，世界を震撼させている無差別テロ，また，治療の難しいＳＡＲＳの波が弘前大学にもいろいろな形で押し寄せています。

明るい話題では，本年度始めの院内コンサートに「青森県出身の麻生詩織さんが歌とお喋りをボランティアで届けてくださいました。」爽やかな声プラス津軽弁のトークに患者さまをはじめ病院関係者は楽しまていただきました。

国立大学は，平成１６年度の法人化を前にして，病院運営のあり方，「医学部附属か，大学附属か」の問題から，管理運営の効率化，経済的な病院の診療のあり方，卒後臨床研修のあり方など検討整理しなければならない課題がたくさんありそうです。

地域に根ざした弘前大学病院としてしっかりとしたビジョンで平成16年度の法人化を病院職員全員で迎えたいものです。最後に，執筆にご協力いただきました皆様にお礼を申し上げます。　（事務部Ｋ・Ｙ）